

「太平山麓九条の会」だより



事務局：須黒法律会計事務所 〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18 FAX0282-22-3757
電話連絡先 0282-22-7079(増田)
Eメール oohirasanroku9jo@yahoo.co.jp HP：太平山麓九条の会で検索

184号
2022年10月21日発行

野口徳さんの戦争体験を聞く会

★日時：12月15日(木) 13時30分から15時
★場所：とちぎ蔵の街楽習館 研修室(4階)



戦後77年、多くの戦争体験者が亡くなり、戦争体験を聞く機会が少なくなっています。そんな中、ロシアのウクライナ侵攻後、武装拡大をよしとする世論が大きくなっているようです。必要以上に恐怖をあおる報道などが大きく影響しているようですが、戦争の実態を知る機会が減っていることも関係しているように思われます。野口さんは、お父さんの仕事の関係で、一家で満州にわたり、そこで、終戦を迎えました。お父さんはシベリア抑留。お母さん、お姉さん、妹さんの四人で引き揚げ船に乗って帰国しましたが、船の中で妹さんを、その数年後にお母さん、お姉さんの三人を亡くされています。そんな体験をした野口さんを囲んで、詳しくお話を聞く機会を設けました。ぜひお出かけください。

戦争体験を聞いたときに思う、「平和のバトン」

太平山麓九条の会は、「平和のバトンを子や孫に渡せるように、太平山に抱かれたこの地域で、ともに知恵を出し合い、9条守る一点で手をつなぎましょう」と、2006年に「九条の会アピール」への賛同を呼びかけてから16年目になります。

これまで、悲惨な戦争の時代を生きてこられた方々から、戦争体験をお聞きする機会を得てきました。子どもたちを引率して乗船した学童疎開船「対馬丸」が、米軍潜水艦の魚雷に…。長年、この悲劇を語る事が出来なかった新崎美津子さんが、初めて「九条の会」で語ってくださいました。広島で被爆された青木美津子さんは、「語り継ぐことが生き残った自分の責務だ」と思い初め、50年過ぎたころから核廃絶や戦争の悲惨さを訴えてきました。宇都宮の陸軍病院(のちの栃木国立病院)で看護婦として働いていた島田久子さんは、「戦争は人を殺すこと殺されること、戦争は二度とごめんだ」と、宇都宮空襲の惨事を生々しく語ってくださいました。シベリアに抑留され、苛酷な労働と厳寒に堪え、奇跡的に生還できたことを、鉄砲水のごとく語ってくださった堀川宇平次さんのお顔も脳裏に焼き付いています。ご紹介したのはごく一部ですが、体験を聞いたときに、「平和を次の世代に渡して下さいね」と、背中を押される思いでございました。

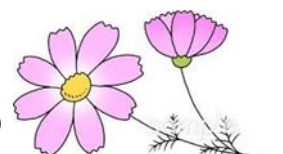
改憲の動きが強まっている今日、おびたしい犠牲と惨禍を経て生れた日本国憲法9条を絶対に手放してはならないと、お一人おひとりのお顔を思い起こしながら、原点に立ち返っています。(大森八重子 記)

「太平山麓九条の会」 たよりを読んで

9月に発行された「たより」の中のU・Aさんの文を読んで、大正時代に書かれた小川未明の「野ばら」が現代に生きていると思った。「いまのウクライナを描いている！」単なる反戦物語ではない。ウクライナの戦争を告発している。古い古い幻灯を上演する意味を改めて考えた。そして芭蕉布が琉球王国から続く伝統だが、沖縄戦で消えようとしたと書かれていて、それを救ったのが人間国宝平良敏子さんで、9月に101才で亡くなったと新聞報道で知った。集いがなかったら記事を見過ごしていたに違いない。手間暇かけて集うことの大切さ、話し合うことの大切さをかみしめている。(G・T 記)

◆◇スタンディング 11月9日(水):市役所前 11月19日(土)ケイズデンキ前
両日とも15時から

◇◆スタッフ会議 11月10日(木)・11月25日(金)・12月8日(木)・12月23日(木)
13時30分から くらら(とちぎ楽習館 2階)





戦後間もないころの、私の子ども時代の思い出

第二次世界大戦終戦の時、私は3歳。戦争中の記憶と
 言ったら頭の上をB29が飛び、その爆音におびえ、防空壕
 に入って耐えていたことです。終戦になっても飛行機の音
 がすると、なぜか解からないが、怯えていました。それが
 20歳まで続いたのです。戦前は父にも収入があつたよう
 ですが戦後は全く収入がなく、母は私たち5人の子ども
 を育てるために、栃木市は下駄の産地でしたので下駄の鼻
 緒の中に入れる紙や綿を扱う商売をはじめました。私た
 ち兄妹の食事は、一番上の姉がほとんど作ってくれ、姉は
 あまり通学できなかったようです。担任の先生のおかげで
 どうにか卒業できたとのこと。私は母の手料理を覚えてい
 ませんが、姉は料理が上手でいろいろ作ってくれました。
 私も小学校のころから鼻緒の中に入れる厚紙をカッター
 台で切っていました。ある日、小学校に母から電話があ
 り、先生から「急いで家に帰るように」と伝えられました。
 「急いで結城に行ってきたらどうだい」とのこと。両毛線で
 小山に行き、乗り換えて結城へ。駅から取引先に行つて用
 事を済ませ、結城駅に戻りました。駅のホームで列車を待
 つていると、貨物列車が入ってきて、運転手さんが「どこに
 行くんだい？」と声をかけてくれ、小山から栃木に行くこ
 とを伝えると「乗って行きな！」言つて貨物列車の運転席
 に乗せてくれたのです。ほんの短い時間でしたが運転席に
 乗せてもらったのです。多分SEだったと思います。その時
 は「早く家に帰れる」という事しか考えていなかったけれ
 ど、このことは80歳になった今も覚えている嬉しい思い出
 です。「運転手さん、ありがとうございます。」この時代、困
 っていたら声をかけよう、助けてあげようという気持ちが
 普通だったのでしょうか。こんな気持ちを私もいつまでも
 持ち続けたいと思います。(増田 記)

「道具は目方と寸法をもつ言葉である」 元井 茂



表題の言葉は道具学会の山口昌利さんのもの。人類が作り出した様々なもの
 道具には形や重さがあり使用目的が明確で言葉をもつというわけだ。

私はかつて弓矢の先端に装着する鏃(やじり)を調べ、石鏃という道具の言葉を考えたことがあった。結論は、弓
 矢として動物に向けられた狩猟道具。しかし、こと弥生時代に目を向けてみると、石鏃は狩猟道具から武器に変質
 していく。農耕社会になり、耕している土地を守ることや、持ち物、貯える物が増え、それらを守るため生産物の分
 配組織、集団を統制する政治権力が生まれ、戦士集団や軍隊組織が生まれ、ついには征服して人や物を奪う戦い
 へと向かっていく。

どうでしょうか。石鏃が発する使用目的の言葉が分かり、変化していることに気づくはず。そうです。個や集
 団が生きるための狩りという闘いから、農耕社会になって権力をもった者が土地を守り新たな土地を支配するた
 めに人や物を奪う戦士を使った戦いへと変質させたのです。

こう述べると、何やらきない現代の世情を彷彿とさせませんか。今や弓矢は使いませんが、考えてもおぞましい
 ミサイルや核兵器などの大量殺戮破壊兵器の話題をニュースでごく日常的に目にし耳にします。そこにさらにおぞ
 ましく醜い独裁権力者が闊歩している。もはや青い地球は維持することさえ困難になってしまうのでしょうか。そう
 してはいけないからこそ地球のどこでも紛争や戦争がないようにすることが、いま現代に生きる私たち地球人の使
 命ではないでしょうか。

だから思うのです。戦力を持たず、交戦権を認めない戦争を永久に放棄する考え方は人類普遍の原理としなけ
 ればならないと思うのです。だから日本国憲法第九条は輝きを増すのです。周辺国の危機をただ煽り、防衛予算を
 肥大化して専守防衛を逸脱してまで攻撃能力を保有すべきだ、とする“目には目を歯には歯を”の思考しか持た
 ない国会議員たちのやり方考え方に私は自分で製作した石鏃に思いを込めて言葉で弓を引こうと思う。「戦争放棄」
 「九条活かせ」と。「21世紀の弥生時代はごめんだ」と。

道具学会山口さんは表題の前にこう述べている。

言葉は寸法と目方のない道具である。 *写真の弓矢は新潟県津南町 農と縄文の体験実習館なじよもん 制作による